「力石」への思い

ずいそう

皆さんは「力石」というものをご存知だろうか。江戸時代から明治時代まで、神社の祭りなどで娯楽と鍛錬を兼ねて盛んに行われていた「力試し」の際に用いられた、大きな石（多くは70～115キロ）のことをいう。現在でも各地に保存され、例えば東京では富岡（深川）八幡宮の境内に力石の記念碑があり、力石を用いる力試しは民族芸能として、1956年に東京都無形文化財に指定されている。

さて、2015年に創立50周年を迎えた本学園は、50周年事業の一環として2017年4月開設を目途に、流通経済大学龍ケ崎キャンパスに新館を建築している。新館の建築に当たっては、IT時代にふさわしい最新の教育機材を取り入れ、学生の学習、教育環境の一層の向上を図るため、大学の未来を見据え関係者が心血を注いで取り組んでいる。

ところで、この建物を造るに当たって学園の過去・現在・未来をつなぐシンボルを、ぜひ作りたいと思案を巡らせていたところ、十数年前に故平原直氏から寄贈された「力石」のことを思い出した。平原氏は、人間の生活全般に不可欠な「運搬」という作業の重要性、またそれを行う人々の社会的地位の向上、運搬作業の過酷さからの解放による労働災害（特に作業員の腰痛）の減少などを願って、昭和初年から地道な研究をスタート、1948年には自ら「荷役研究所」を創設して物流の科学的研究に着手した斯界（しかい）のパイオニアの一人である。

本学園に寄贈された「力石」は3個あり、それぞれの石には重量、名前などが刻字されている。その中に、『再会　試力石　秋葉原』と刻された石があり、筆者は『再会』の刻字に大いに興味を引かれ、その石の由来を調べてみた。

平原氏の著書『物流の歴史に学ぶ人間の知恵』によれば、『再会』と刻字された石は、第二次世界大戦前に日本通運株式

会社秋葉原支店にあったもので、同社が作業員を雇う際に持ち上げさせて採用・不採用、賃金の額などを決めるのに使われていたものであること。戦時中の空襲等により紛失し、関係者の懸命の捜索にもかかわらず行方が分からなかったところ、戦後の国鉄秋葉原駅改修工事の際に偶然掘り起こされたものであること。これを大いに喜んだ関係者が当時の秋葉原駅長に『再会』の揮毫を依頼し、石に刻字したものであることが判明した。「力石」は祭礼や娯楽だけではなく、実業でも愛着をもって使われていたのであった。

本学園は1965年に日本通運株式会社の出捐により設置されたが、当時の学則には「経済学一般就中流通経済」の教育、研究が学園設立の目的とされていた。当時はわが国経済の高度成長期に当たり、今後急速に発展するであろう流通（物流）分野の科学的研究と最先端の学問、技術を修得した人材の育成が強く求められていた時代であった。

野尻 俊明●日通学園理事長

爾来50年、現在では中規模総合大学に発展したが、その原点は社会のニーズに応え、人々の生活を豊かで健康的なものにするために研究、教育の面から貢献することに変わりはない。

近年、ネット通販などの拡大による個人の物流ニーズや、グローバル化した産業、社会にあって、ロジスティクスの重要性が増大している。しかし、物流産業の分野では他分野以上に労働力不足が顕著となっている。そうした中にあって、本学が有する3個の力石には、科学の力によって物流をめぐる労働環境を改善し、人々のより良い生活環境実現への貢献の思いが込められている。新館に展示される3つの「力石」は、本学園創設の原点を常に想起させ、地道な不断の努力の重要性を継承するモニュメントになるものと信じている。